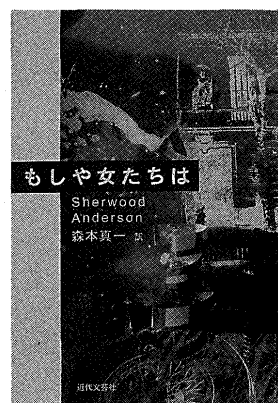


S・アンダーソン著
森本真一訳

『もしや女たちは』

緒方孝文

教職に就いては二十二年という歳月が過ぎてしまったが、今振り返ってみると、私の修行時代は森本真一氏を抜きにしては考えられない。はじめ専任に就いた桐朋学園大学短期大学部で、私を温かく迎えてくださったのが森本氏であった。まだ何も知らない未熟な私とは反対に、氏は当時すでに豊かな経験をお持ちであったが、上司ぶったところは微塵もなく、常にやさしい同僚として私に接してくださった。氏のお人柄は、二人の直接の恩師に当たる佐藤孝己元淑徳大学教授の温厚な性格を受け継いだものであると私は解釈している。森本真一『アンダーソンとフォークナー』の「あとがき」に書かれているように、「自分を卑下してユーモラスな雰囲気を作ろうとする」激石的な性格がまさに佐藤氏、森本氏のヒューマニズムの源泉となっているのである。桐朋は芸術系の大学であるだけに、个性的で自由な校風を生かしたカリキュラム作りに若い教員のエネルギーをぶつけ



2006年4月20日発行
近代文芸社
四六判 123頁
定価 1600円(本体)

る課題がたくさんあった。私が入って一年後に欧米文化専攻主任になられた氏は、常に積極的に仕事に取り組まれ、「主任」というよりも「死人」だと冗談を飛ばしておられたが、冷静に一つひとつ処理されていく姿は、新参者の私には見えているだけで勉強になった。

しかし、私が森本氏に尊敬と親しみを感じるのは、単に教職を通じてだけではなく、文学を志す者同士の暗黙の共感があるからだろうと思う。英文科を出た英語教師は得てして「英語」を教える語学屋と誤解される傾向があるが、森本氏も私もたまたま手段が英語であったというだけで、目的は文学研究であることがお互いにわかっているという安心感があった。桐朋の研究室は教員四名が入る雑居部屋であったが、氏はよく私の書棚に並んでいた漱石の研究書や村上春樹などの若い作家の本をコピーさせてくれとおっしゃった。文学談義をすると、氏の口から必ず日本文学の某作家が

同じようなことを言っているとか、同じようでありながらここが違うとかいう言葉が漏れ、常に国籍や時代を超えた視点で文学を見ておられることがわかる。氏は「日本比較文学会」に所属しておられるが、ひとつの学問分野としての「比較文学」ではなく、文学本来のあるべき姿としての国境なき文学の本質を学ばれていたように思う。古典から現代文学に通じる広範な視点とジャンルを超えた考察（たとえば、落語や食文化などの素養まで）の奥行きのおかげに、氏の文学に対する誠実さがひしひしと感じられるのである。

こうした森本氏の文学的誠実さは、研究業績を見れば一目瞭然である。上智大学の大学院で打ち込まれたフォークナー研究を核にして、フォークナーとつながりのあったアンダーソンに研究領域が広がっているが、単に二人の作家の個人的交遊録にとどまらず、アメリカの近代化の波を身をもって経験した作家たちの鋭い文明批評に目を向けている点で、新しい視点を開いた。一方で、『日本近代文学と西洋』『滅びと異郷の比較文化』（以上、共著）、「現代日本のキリスト教文学―比較文学的研究のこころみ―」といった日本文学との関わりを論じた著書・論文群において、日本の近代文学がいかに西洋の文学・文化の影響を蒙っているかが細かく論証され、その成果は国際会議でも

度々発表されている。

さて、今回翻訳された『もしや女たちは』(Perhaps Women, 1931)についてであるが、この作品は『オハイオのワインズバーク』から十二年後、アンダーソンの執筆活動の後期(亡くなる十年前)に書かれている。著者の「緒言」に書かれている通り、物語、不完全な韻文、論評が入り混じっており、むしろこうした形式的不均衡、不統一の中に、旧弊を打破しようとするアンダーソンらしい意気込みが読み取れる。ときに物語風な枠に包んで、ときに直裁的な批判として展開されるアンダーソンの主張は明解である。アンダーソンにとってアメリカの近代化は工業化を意味し、それは冷たい機械が人間の温かい手によって成り立っていた手工業を蝕んでいく過程であった。アンダーソンはこうした機械文明に対する批判を男性の自信喪失、女性への期待というジェンダー論と結びつけて、「思案と討議の材料」として読者に提供している。

しかし、「モダンタイムズ」(一九三六年)を製作したチャップリンがそうであったように、文学者アンダーソンも結局のところはヒューマニストである。機械文明の侵攻を批判しながらも、機械Ⅱ悪、機械に翻弄される男性Ⅱ悪と類型的に見なす危険性に対しても慎重である。むしろ、アンダー

ソンの主張は、不可避的に時代の推移により生まれた機械に畏怖の念を抱き、自信を喪失した男性を見捨てるのではなく、エンカレッジするのがこれからの女性の役目であると、善悪の類型化を避けた捉え方をしている点を見失わないようにしなければならぬ。織機の稼動音を「ダンス」と見なし、深夜まで響く工場の騒音を「歌声に似た唸り」と描写したアンダーソンのヒューマニストとしての温かい身体感覚が、森本氏の翻訳を通してみごとに伝わってくる。表題の Perhaps という

語も希望に満ちた非常に暗示的な言葉である。おそらく冷徹な否定的表現で終わることのないように、翻訳に苦労されたにちがいない。なお、この作品のかなり詳しい梗概を堤浩二氏が一九七〇年代に *Heron* という雑誌に連載しているが、原文のままの部分もあり、単行本の完全な邦訳としては本書を本邦初訳と見なしてよいだろう。

もうひとつ私が注目したいのは、ほぼ四分の三世紀前に出版された原書本が、当時のアメリカ文明社会への批判書であるだけではなく、世界に通じる現代の病弊をすで見通し、現代文明への鋭い批判にもなっている点である。たとえば、一九八九年にイタリアで唱道された「スローフード宣言」は、ファストフードに対抗する食文化改革運動という狭い範囲で論じられがちであるが、もと

もとは工業文明のもとに生まれたスピードを象徴する自動車の出現を糾弾することに端を発している。かつてのスピードの象徴である自動車は、現代ではパソコンや携帯電話といったIT機器に置換できるかもしれない。いずれにしても、こうした文明の利器が、逆説的に格差社会を生み出し、社会構造や人々の精神構造までも根本から変えてしまうことを、アンダーソンはすでにいち早く見抜いていたのである。アンダーソンが現代社会を見たら何と云うであろうか。

本翻訳書は森本氏の透徹したアンダーソン研究の一端であり、アンダーソン『樫の茂る丘へ アメリカ昔語り』(一九九五)、ウエルフォード・ダウナー・テラー『シャーウッド・アンダーソン』(一九九六)、森本真一『アンダーソンとフォークナー』(一九九九)、アンダーソン『幾度もの結婚』(二〇〇三)(以上、いずれも近代文芸社刊)とぜひ合わせてお読みいただきたい。各書間で作品名の翻訳に不統一があるのが残念だが、これも絶えざる研究成果の末のことであるので致し方ないであらう。

(おがた たかふみ 駒沢女子大学教授)